



叙
景
詩

金尾
子 上
薰 柴
園 舟
選



911.168

『叙景詩』とは何ぞや

野の鳥に聞け朝の雲に希望を歌ひ夕の花に運命を
さしやくにわらずや谷の流に見よみなぎる瀬には
喜の色をわらはし湛ふる淵には夏の影をやどすに
わらずや。

自然は良師なりよく吾人に教訓を垂れ鞭撻を加へ
神秘を教ふ之をとりて素となし之を以て彩となす
天賦の畫こゝに於てか成り真正の詩これに由てか

特ク
582

二

三

出づ。

詩と畫と其極致に於ては乃ち一なり自然の景趣に
對して揮灑縱横し朝霞夕煙風雲竹樹悉く取て片絹
隻紙の間に寓せしめ而して神秘の影おのづから其
中に動き觀者をして血の湧くを覺え聽者をして肉
の躍るを感ぜしむるものこれ畫の至れるところに
してまた詩の極れる處なり學んでこゝに至る豈他
あらむやたゞ自然に従て之を寫すに在り寫して人

77W13884

意を挿まざるに在り。竊かに訝る、今時の詩に志すものたゞ、淺薄なる理想を咏じ、卑近なる希望をうたひ、下劣の情を據べ、猥雜の愛を説きつとめて、自然に遠ざからむと期し、而して、真正の詩、以て、得べしとなす、謬れるの甚しきにあらずや、新進の書家、筆を深林廣野の間に試み、直に、天真を發揮せんと欲するに比せよ、其徑庭、果して、如何ぞや。

四

吾人、未だ、詩を知るの深きものにあらず、然れども、陋劣の情を抛ち、卑淺の愛を棄て、雲を寫し、森を描き、草舍竹木を咏じ、田園蔬菜を賦し、一往直進、自然の懐に入り、神秘の鍵を握る、彼の新進書家の如くならむと欲す。これ、實に、詩の極致に達すべき捷徑なりと信ずればなり。

五

明治三十四年冬十二月

選者しるす

例言

一、叙景詩一篇、短歌三百首、悉く皆、新聲歌壇の粹を抜けるもの。景に對して情を思ひ、情に對して景を思ふ。多様な當時の歌壇、確かに、異色あるを信するなり。

一、詩しきは、當時の歌なり。語は、驗ならむを期し、調は、怪ならむを欲す。而して、滿面得意の氣あり、慨すべき哉。吾人、こゝに鑑みるあり。乃ち、特に、聲調流麗、格律高雅なるものを取り、以て、此篇を大成するを期せり。唯、微力、よく罪を扛ぐるに能はず。願みて、忝怩たるもの多し。

一、加之、本書選述の事、もと勿卒に發して、覺に、精煉陶冶するに違なく、意を得ざるもの、實に二三に止まらざりしを憾ますむばあらず。吾人乞ふ、他日を俟ちて、これを完備せむと欲す。諸君、諒せよ。

一、卷末添ふる所の單作は、眞に、鶴肋に過ぎず。冀くは、これを以て、他に累を及ぼさざらむことを望む。



古 城 平 福 百 穂

叙景詩

(二百八十二首).....

敗蕉.....尾上柴舟...七六
寒菊.....金子蕭園...八九

表紙.....結城素明
古城.....平福百穂
冬曉.....結城素明
綠陰.....平福百穂



古 城 平 福 百 穰

蘇 各 百 表
 陽 陽 城 城

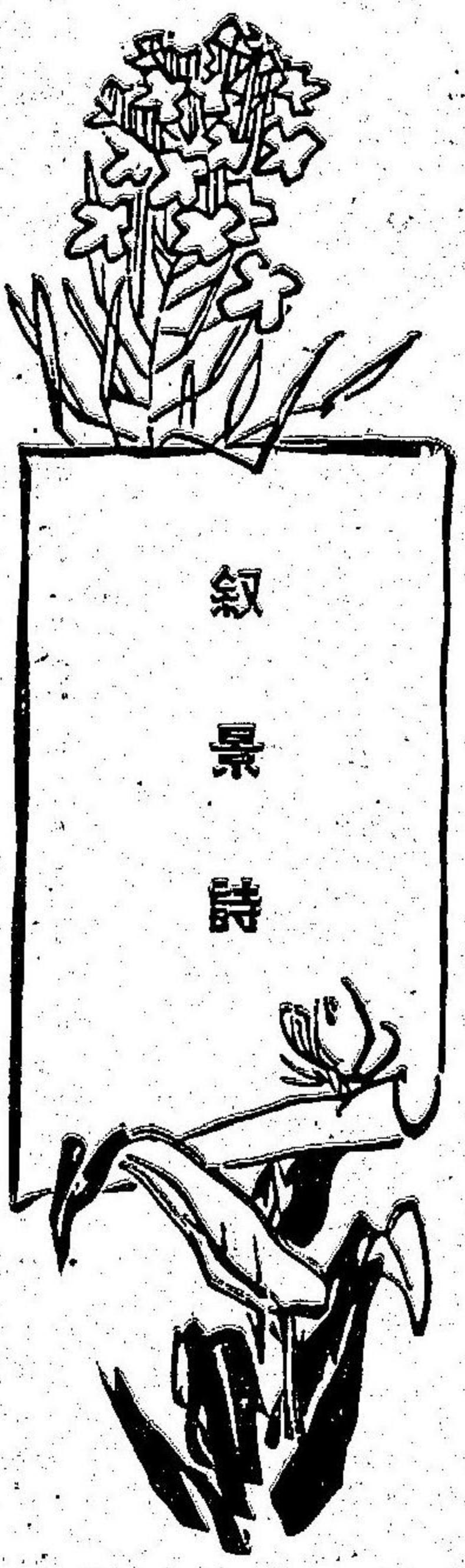
叙 景 詩
 安 政 州

平 蘇 百 蘇
 蘇 城 蘇 城
 蘇 蘇 蘇 蘇

金 子 蘇 陽 人

蘇 上 蘇 陽 人

美
田



○ 矢を負ひて雉子落ちゆく山もとの菜の花はたけ夕もや
こめぬ

○ 關戸紫苑

○ なにとぞか御堂の壁にかきつけて若きたゞ僧花ふみて
いにし

○ 河田白露

○ 朽木 鬼佛

とぞれとぞれ 麓の水のほとけはしてさくらちるなり方丈
のまど

○ 宮本 軸浦

彈丸のあとまほく 残れる若松の大手のさくらはなさき
にけり

○ 服部 直一郎

風をやみてこもれる窓の窓かけにうつれる花の影まば
らなり

○ 原見 白雁

三かゝへの大木のさくら 春たけて神代ながらの花さき
にけり

二

三

○ 金子 烏江

すみれ咲く岡にのぼりてなき友のひつぎおくりし寺の
花見る

○ 朽木 鬼佛

讀經とくきやうやみて盡しづかなるやま寺の阿伽井の水に花ちり
うかぶ

○ 福田 鏡三

川下にうかぶかもめも見えぬまでゆふべしきり花吹
雪する

○ 河田 白露

ちる花に女御のみくるまわゆみおそし御室あたりの春
の夕暮

○

武山英子

見送りし人のすがたの見えずなりぬ
萱さく野のあぼる
夜の月

○

益宮冷雨堂

さくら咲くふるき都のあぼる夜を
笛ふきて行く公達も
わらず

○

四島南翠

舞姫の小さきあひまぞうつくしき
四條のはしの春の夜
のつき

○

琴春二

みやしらの鈴さきはらすゆふ風に
ひろ前白くちるさく
らかな

四

五

○

平井晩村

誰が墓にそなへむとてか花もちて
をさな子入りぬふる
寺の門

○

間枝蘇白

菜の花にすも菜まじれる山はたに
には鳥なきて春のど
かなり

○

朽木鬼佛

にはとりの屋あたくかにきこゆなり
菜たねはな咲く江
南の家

○

野村重雨

うつくしき繪日傘のむれ過ぎゆきぬ
菜の花ぐもり川沿
ひの道

○

始 天 生

菜のはなのはたの中みち嫁いりのひとむれすぎぬ月う
すき宵

○

本 尾 秋 遊

あたしかき雨はれゆきて磯山の松おほきところ霞たち
のぼる

○

白 繻

里とほき火葬のけぶりたなびきて小山のほとり菜たね
花さく

○

天 沼 桃 村

雲はあらず東つくばにかすみこめて田ばたの里の春長
閑なり

六

七

○

阪 本 梳 子

君が家のまゝしとあふぐ老松の齋のふる巢をかすみこ
めたり

○

寺 田 桐 月

見るがうちに夕の霞深うなりて星かげあはし妹が家の
あたり

○

藤 鮭 川

一すぢの砂利道ゆけば右ひだり菜のはなばたけ風のど
かなり

○

阪 本 梳 子

菜ばたけのつくるあたりは寺見えて胡蝶追ひつゝ雛僧
の行く

○

關戸紫苑

鈴菜さく小島をちかみたま〜に蝶舞ひくなり舟のへ
さきに

○

須田幸雨

雨ほそきうらの菜はたけひなつれて菜の葉ついはみ鶏
あそぶ

○

野村靈雨

鶏をとやに入れおきて何となく背戸の菜はたけ一めぐ
りしぬ

○

及川清洋

毛糸をばあむ手やすめて菜の花をはなれし蝶の行方を
ぞ見る

八

九

○

吉植愛劍

梅さけるわら屋の軒に日の丸のみ旗なびきてうぐひす
の啼く

○

福田義三

御苑生にすみれ摘みますすひめ宮のわけのはかまに春の
風ふく

○

暖男

水ぬるむかどの小川にふたつ三つ家鴨うかべり日は午
にして

○

月磨

やけのこるみ寺の門のくちやなぎ片枝芽ぶきて春のか
ぜ吹く

○ みすゞのや

かりそめに結びし妹があげまきの髪のほつれに春のか
ぜ吹く

○ 伊東金星

おぼろ夜を利根の川づら風たちであしきにゆらぐふね
の燈火

○ 力石白鷗

おとうとの草紙干したる紅梅のはななきえだに四十か
ら啼く

○ 吉植愛劍

湯のたぎるおとばかりして南のうめさく窓のひるしづ
かなり

十

十一

○ 内藤夕波

苦むせるおくつきどころ白梅の花ちりやまで日は暮れ
にけり

○ 朽木鬼佛

水あろく梅が香さむき野のみちをさまよひをれば月山
を出づ

○ 須藤維川

なにげなくつま戸を押して中庭の梅のはな見るうす月
夜かな

○ 清野はま子

苦をあげて笛もちいでしおまの子の志らべも低し春の
夜の月

○ 宮崎 燕雨

うら庭の老木のうめの花ちりてうぐひす啼かずたは
るの雨

○ 服部直一 郎

窓越しに見えし野でらのわらしきも霞にきえて春さめ
のふる

○ 新庄 竹 漕

名にたかきまぼりの椿いろあせて春さめさむしてらの
おく庭

○ 奥原 東 雲

さめやかに春の雨ふるゆふぐれをさら桃ちりて人はか
へらず

十二

十三

○ 福田 鏡 三

桃の花ちりてうかべるさと川にちひさき魚のさかのぼ
る見ゆ

○ 佐々木 寛 綱

半のちしきぼる男のかげ見えてまき場のあたり桃さか
りなり

○ 服部直一 郎

母刀官がむそぢのうはひこよひすとよろこぶ宿に桃の
花さく

○ 尾 花 生

鶏のごまにまじりてそりくは梭のふときこゆ桃ちほ
きると

○

賤

男

牛ひきておきな歸りぬ酒買ひてあうなかへりぬ桃さけ
るやど

○

金子鳥江

野の末の古城とよぎのあたりまら桃の花ほの見えてゆふ日さ
すなり

○

秋 星

銃とさまにさげし獲物の雉子の羽に春のゆふ日のかげ美
くしき

○

間 枝 藤 白

春の菊芥子にまじりて咲くはたの中に干したり蛇の目
から傘

十四

十五

○

池 本 奇 森

みづ車のどかにめぐるおとすなりやなぎ一里の川沿ひ
のさと

○

福 田 鏡 三

川沿ひのやなぎまだるゝ居酒屋の暖簾くゞりぬあみ笠
ふたり

○

新 庄 竹 漣

れんげ咲くはたの畦みちむつまじく花環造れりおと
ひ二人

○

寺 田 桐 月

わか草にあそぶ羊のひとむれにやさしくあたる春の日
のかけ

○ 内田夕闇

やはらけき若草ふみてかへりゆくはたごの馬の鈴の音
ひくき

○ 秋 屋

白鳥の飛ぶかけ見えてはらくと松のはなちるみさし
ぎの池

○ 平井晩村

夕づく日荷駄入る門にてりはえて長者がのきの松のは
なちる

○ 牛田曉月

藤の花ながく垂れたる孔雀小屋ひるまさびしく小雨を
ぼふる

十六

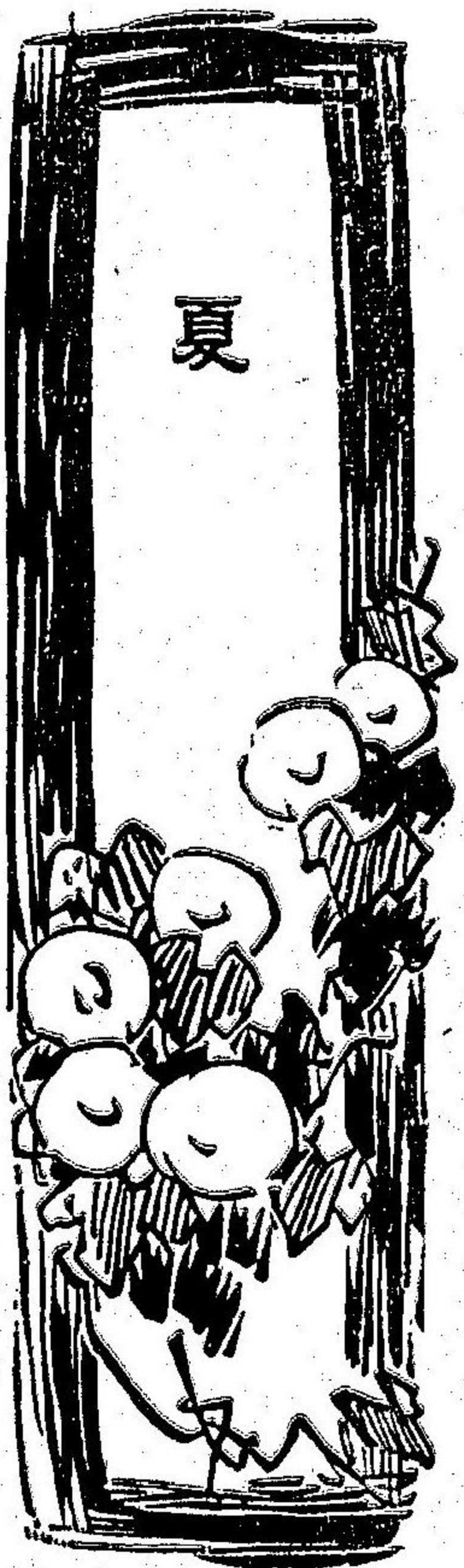
十七

○ 川田霞溪

行きくつつきぬ山路のつくるところ白藤をきて日は
斜なり

○ 三栖堂江

ゆふかぜに南圓堂の藤ちりて錆びしつりがねのつか
ら鳴る



○ 見島青嵐

下加茂のまつりひるより雨になりてぬるゝ冠の人うつ
くしき

○ 本多杏江

大河をのぼる白帆の帆ばしらにつばめむらがる朝ぼら
けかな

○ 木曾滋

新墾の桑ばたとほく富士見えて桑つむうたのこゑのど
かなり

○ 岡 稻里

桑の葉をつみし小舟に棹とりて橋のした行くさとのを
とめ子

○ 岡本春陵

いたち出でて背戸に鷺鳥のなきさけは夏の真晝を栗の
花ちる

○ 西島南峯

山伏のおしのよわきが行きすぬ松ばら三里さみだれ
のころ

○ 四島南峰

苦みきし小舟ふたつに日は暮れておし原つつみ五月雨
のふる

○ 谷村 四峰

村をさの住むてふ岡のかぶ木門鯉ののぼりのふくらか
に立つ

○ 四澤 蘆園

森かげに五月のぼりのゆらぐ見えて田舎の夏の晝しづ
かなり

○ 上村 紅林

柏手の音におけゆくみやしろの森のわか葉におさ日て
りそふ

○ 内田 夕關

わか葉さす森のしたかげ雨はれて色づきそめし草いち
どかな

○ 金子 鳥江

あたしかきあしたの空に雲いでし白木のみや居たち花
のさく

○ 福田 磯三

方丈のさび竹の椽人氣たえてゆふべまづかに棕櫚のは
なちる

○ 竹 堂

去年の秋やけのこりたる米倉のよこのふる杉わか葉さ
したり

○ 内田歌夫

あたゝかき神のみ息やふれつらむ草むらがくれ覆盆子
色づく

○ 大井波葉

いちど實る野川の岸をひつじ退ひてかへる童のくさ笛
きよき

○ 西尾薫江

あかき花そろひて咲きぬわが庭のあふひふたもとたか
さ三尺

○ 横山屋樓

庭の隅の背低燈籠の苔ぬれてかじの遺ふ見ゆさみだれ
のころ

二十二

二十三

○ 矢ヶ崎賢次

雨にぬれてかきつばた折る手弱女の小傘かすめとふ
燕かな

○ 伊東茂々樓

燕とぶはしのたもとにたゝずみて妹が家見るゆふべす
いしき

○ 植野鴨村

清水くみて青葉にそゝぐ朝な／＼まつのせみきく山科
のさと

○ 中島龍香

山鳩のたつ羽ばたきにぬむの木のおか葉ゆらぎて日は
斜なり

○

福田 義三

水車ゆるくきこゆるわら小屋の背戸にさきたりきら百
合の花

○

鹿島 霜風

夏ぐさのまげみか中に百合さきて迷ひ入りけりさるき
胡蝶の

○

折竹 曉夢

溪わひに霧たふよひて日はくれぬ百合の花の香たれ身
に迫る

若葉しげき林のあくのはて見えてちひさく咲けり白百
合の花

○

絹 水 耶

二十四

二十五

うす絹の圓窓なかばあしわけて蚊帳かまどごしに見るさくら百
合の花

○

遊 佐 蒲 月

朝雨にぬれつゝあそぶには鳥のなく音しづかに豆のは
なちる

○

登 阪 北 嶺

葉柳の雨やしるきあけがたを軒のともしのかげうす
れゆく

○

暎 尾

ゆふ月に馬うち洗ふ賤の男にやま路を問へばなくほと
しきす

○

福 田 義 三

やけ山のふもとの茶屋に駕籠ありてやすらひをればな
く郭公

豆腐買ひてかへるはたみち月いで一盃なきぬ山ほと
しぎす

○ 本多 杏江

湯の宿の窓の若葉に雨ふりて火ともしごろを啼くほと
しぎす

○ 冷 雨 生

ものゝふの矢ぶみをよめる篝火に松風ふきてほとしぎ
す啼く

○ 奥 原 泣 詞

雨はれしまつばら過ぐる旅人の小笠のうへになくほと

二十六

二十七

しぎす

○ 寺 田 桐 月

西に急ぐ朱塗の駕籠の見えずなりてほとしぎす啼く明
方の空

○ 吉 植 庄 亮

燈つけて公達弓をきそひつる那須野のはらに啼くほと
しぎす

○ 洲 羽 修 丈 郎

雨はれてなくほとしぎす一こゑに一里松ばら月はいで
にけり

○ 益 富 冷 雨 堂

姫君の御惱とふべくわた殿を紙燭さしゆけば啼くほと

ゝぎす

○ 福田 義三

牛ひきてたがへす笠のかつ見えて青田にうつる晝の月
ほそし

○ 山口 吟風

立山のみねよりいでくくりからの峯にわけたるなつの
夜の月

○ 登坂 北嶺

水打ちし竹の葉ずゑに月見えて十歩のにはとすゝしか
りける

○ 洲羽 修文郎

撫子をはしらに活けて木の芽にる敷寄屋の晝の雨しづ

二十八

かなり

○ 内田 夕蘭

夕立は波のうへ遠くすぎゆきていり日にほへり虹のま
つばら

○ 野村 董雨

ゆゝしくも垣めぐらせる村をさの家ひる庭きりのは
なちる

○ 朝倉 雨月

みやしろの鈴ふきならすあさ風に池のはちすの花ひと
つちる

○ 荒木 枯圃

つきやまにみづをうたせて竹椽に今のおとらの酒くみ

二十九

たきふ

岡一 稻 里

みやこより訪ひ来し友と窓をあけて青田のすゑの夏の
山見る

福田 幾三

山かげの青田にいとみせらさきの三つ四つ見えて日は
斜なり

岡本 春陵

大連のみなどのあたりあめやみて金州のそらにじよこ
たはる

二神 蘭圃

沖見つゝまばしゝこひぬ峠路のひるま涼しきまつかげ

三十

三十一

にして

伊東 茂々 權

さ夜ふかく涼しき風をひとりしめて加茂川づつみ笛ふ
き下る

若林 醉霞

犬つれてほたる通ひゆくおとうとの足もとあやし畑の
中みち

滋 雄

雨やみてふく風薫るこのゆふべぬれしほたるの青すだ
れ道ふ

四村 松雨

露しげき野邊のすゝきに隠れたる辻堂見えてほたる飛



平福百種

縁蔭

ぶなり

川合長流

夕月のすこしもりくる木のもとに馬洗ふ湯のゆげほの
じろき

矢ヶ崎柴垣

蚊やり火のけぶりたなびく背戸畑に長き糸瓜の風にゆ
らぐよ

内田紫翠

みだれたる玉蜀黍のはなのうへに蜻蛉とまるよ風にふ
かれて

福田幾三

はたごやの軒のすだれを捲き見れば三笠の山は夏かす

みせり

○

榎木 瓦雄

妹は日傘かざして日をよけぬ今朝さきそめしあさが原
のはな



○ 川合長流

○ 亂れたる雲をさまりて森のうへに二十日の月の影さや
かなり

○ 折竹曉夢

○ 葦刈りのわすれゆきけむ鎌の刃につゆも宿りぬ月もや
どりぬ

○ 絹水耶

三十四

三十五

葦間ゆく小舟に鏡音のあとすなりいそべの松に月清き
ゆふべ

○ 吾妻耕一

○ こほろぎのなく音さびしく夜は更けて桐の木高く月す
み渡る

○ 川合長流

○ 秋たかき槿の木ずゑに月すみて鳥の羽ばたくおときこ
ゆなり

○ 高月莖花

○ 盆燈籠かげほのぐらき軒のはを蚊遣のけぶりいくめぐ
りしつ

○ 荒木枯園

はねつるべきしる籠の糸すゝき二すぢ三すぢ穂にいで
にけり

○ 鈴木 豊村

ふたつ三つ蜻蛉せむぎ飛ぶなりともし火のともしともらぬ川
面の里

○ 高日 静江

繩朽ちし垣にからまるあさ顔も實がちになりて雁なき
わたる

○ 長谷川 霞村

雨そしく庭の芭蕉のしたかげに立つには鳥の身ゆるぎ
もせぬ

○ 岩淵 白梅

ふづくゑにひとつちり來し桐の葉にあやふくすがる蝶
醉かな

○ 印南 里人

水あとのうち手の庭はあれはて、草の月夜にきりく
すなく

○ 荒木 枯園

蟠螂をのせたる桐のひと葉あちぬはき清めたる庭のい
さどに

○ 北村 志真郎

新しき卒塔婆のあたりとぶ蝶のつばさつめたくさす夕
日かな

○ 内田 夕闇

夕づく日葡萄の房に照る見えてびめの聞ゆる妹がすむ
あたり

○ 四村 松雨

さかり過ぎて鉢をぬかれし朝がほの枯葉にのこる秋の
日の影

○ 金子 鳥江

馬子ひとり入日背にして多摩川のいた橋わたる秋のゆ
ふぐれ

○ 武山 英子

幣を手に雁を見おくる人わかし加茂のやしろの秋のゆ
ふぐれ

○ 須藤 鮎川

三十八

三十九

池殿のおけのおはしま人たえてはすのかれ葉にゆふべ
雨ふる

○ 荒木 枯園

河に沿うてかや原一里家もなしゆふ月すどくあきのか
ぜ吹く

○ 布

羽づくろふ鳩の羽一つ軽く落ちて秋のゆふべを雨ふり
いでぬ

○ 鹿島 霜風

めぐり来てむかし住みたる村に入りぬ芒さびしき秋の
夕ぐれ

○ 和田 吹雪

うぶすなの森に夕日はかたぶきて背戸の蕎麥はた秋の
風ふく

須藤 鮭川

尾花さく野川のつゝみ風見えて晴れたるそらに鶯たか
く舞ふ

高橋 藻水

さきこのる籬の桔梗いろあせて小雨ながらに日はくれ
むとす

朽木 鬼佛

ねやの灯のひかりうするゝおく庭の秋海棠に小さめそ
ぼふる

武山 英子

四十

四十一

几帳たれて中宮ひとりものおぼす里の内裏にむらさめ
のふる

須藤 鮭川

夕餉たくけぶりほのめく垣の外との木樫のはなに小雨そ
ぼふる

岡 和里

うちわたすつゝみ十里の秋のみづに流るゝべにや夕や
けの雲

高日 翠園

からす瓜遣ひのぼりたる鐘樓にかねはあとせざたし秋
のかぜ

本多 杏汀

法の師のかき根つくるふ木鉄にこぼれてかゝるあらし
ぎの花

○ 福田 義三

巖かげの石のほとけの膝ちかくかをりそめたり蘭のひ
ともと

○ 櫻木 瓦雄

夜のいろは森のかげよりせまりきて綾瀬あし原風まろ
う吹く

○ 南 溪

金屏にともし火のかげほの白きあけがたちかく雁にし
に飛ぶ

○ 福田 義三

四十二

四十三

秋風にまら帆まきあぐる大船の帆ばしらかすめ雁なき
わたる

○ 鈴木 望村

粟畑のまなかに立てるひとつ家には鳥なきて秋の日
黄なり

○ 丸林 好家

五つ六つあきつみだれて粟の穂のなびくゆふ畑あきの
風ふく

○ 須藤 鮭川

まづの男が稻束はこぶかり納屋のうちの櫃にゆふ日さ
すなり

○ 北村 桃波

刈穂負ひてをとこ女おんなのかへりゆく稲田のすゑに夕けぶ
り立つ

釜川

讀みあきて草にあきたる書よみの上にちさき蜻蛉せみの去りて
又くる

村越雲外

うすき羽はに秋のゆふ日の影うけて蜻蛉せみむれ飛ぶ枯あし
の上に

野村暈雨

鶏頭けいずにゆふ日うするゝ小柴垣さゝやくあぶのこゑきつ
かなり

荒木枯園

四十四

四十五

やすらかに厄日やくにちすぎたる畑なかの鶏頭けいずの花にゆふ日か
やく

澤田伏猪

竹の戸をひらきて見れば野はひろし行く水長し秋の山
やせぬ

野村暈雨

街道のひとと榎かぜたえてうすきゆふ日にもずなき
しきる

小川小波

岡の上に家一つ見えてまぶ柿ののこる木末にもずなき
しきる

秋涼

乗りなれぬるなか車にたれ一人野道すぎ行けば賜ぞな
くなる

○ 平井 晩村

やなぎかけ酒賣る家のはたさびしゆふかせさむき信濃
路の秋

○ 阿部 静江

柴おひてかへるゆふべのすゝき原あき風さむく鹿のこ
ゑする

○ 咲良 露人

妻とよぶ籠のうづらのこゑさびし萩のみだれのいとち
もき夕

○ 河田 白露

うつくしきみ魂たまごを負ひし白き鳩の今日も歸らて秋の日
くれぬ(薄氷女史の追悼に)

○ 柄木 鬼佛

權枯れ卒塔婆くちしゆくつきに知らぬ秋ぐさはなまし
ろなり

○ 大畑 豊子

さ夜ふけて經よむ窓の灯あかりうすれ阿伽井のほとり虫なき
しきる

○ 小田 宮華溪

には鳥の午のときなくこゑやみてわたしかき日に木犀
かざる

○ 森 脇 錦水

伏屋ありめぐり畑あり菊咲きてあるじのおきな缺もち
てあり

岡 稻 里

道ばたの一もと野ざく雨にぬれてとまれる蝶の羽おも
げなり

佐久間 穂 峯

狐ひとつ出でがくれして川沿ひのさくはら一里雨にく
れゆく

川 合 長 流

文車（たづな）のひらきにすこしとほれけり床に活けたる志ら萩
のはな

井 倉 素 月

四十八

四十九

いもうとの月にそなへし穂すゝきに虫のきてなく文机
のうへ

福 田 義 三

燈籠の火影うするゝきはしに虫の音ほそく夜はわけ
むとす

長谷川 露 村

瀧のおとちかくきこえて夜（よ）の氣にころも手さめる箱根
山みち

關 月 紫 苑

松山のおと霧はれぬ日はさしぬ駒にむちうつそのうし
ろかげ

吟 月

繪の筆をたにの清水にあらひをれば峯の松原きりうす
れゆく

○ 見島青嵐

わたし舟呼ぶこゑ遠くこだましてひろき川面きりたく
れゆく

○ 吉田朝房

うすれゆく月影さしてひとむれのからすなきたつ峯の
あさ霧

○ 須藤鯉川

ありあけの月かげ淡き野のすゑの狭霧の上に富士しろ
く見ゆ

○ 河田白雲

五十七

五十一

わかれ来し里はさざりに見えわかず峠三里のあめのゆ
ふぐれ

○ 大堀聖子

夕日さす野べのかやはら風たえて蜻蛉せいてん飛びなり高く又
ひくく

○ 川合長流

みぎせむか左せむかたとゆたへる橋のたもとを蜻蛉せいてん飛
びかぶ

○ 井倉素月

亡き母のあつくき訪へば草むしてひるも虫なく花筒の
あたり

○ 荒木枯園

弟の野邊にとらへしくつわ虫はやかごなれてなきいで
にけり

○ 關戸紫苑

あしの花の蔭にかくれて洲のさきにふと現れし君が小
ぶねよ

○ 千葉夕浪

木の實はむ栗鼠のことゑして秋ふかき岡へのはやし達静
かなり

○ 長谷川香村

うちわたす葡萄はたけの末遠くむらさきにほふ富士の
雪見る

○ 武山英子

はぎすしき桔梗かるかや藤袴みなたけのびてうらがれ
にけり(秋の末百花園にて)

○ 中島龍香

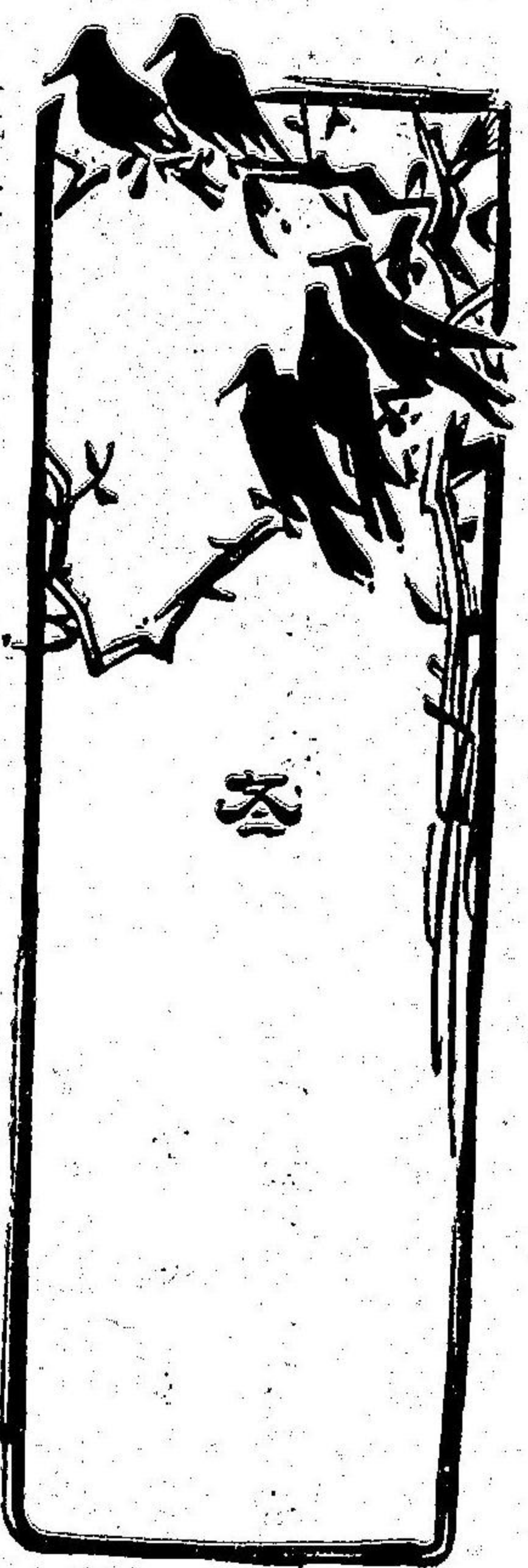
銀燭に雨のもみぢをてらさせて國のつかさのうたげし
たまふ

○ 鳥取指滴

夕げたくけぶりめぐれる賤が家の柿のもみぢに入日さ
すなり

○ 千葉夕浪

夕やけの空うるはしき森かけを黍つむくるまおもむる
に行く



○ 福田 義三

鷹がりのぬり笠あまたかへりくるかれ野のゆふへ霞た
ばしる

○ 岡田 祐静

山ひくく菩提樹たかき村はづれふゆの夜の月やな
めなり

五十四

五十五

○ 本尾 秋遊

冬枯の野路のゆふべを小ばしりに賤の男ひとり鍬かた
げ行く

○ 須藤 鯉川

夕まぐれ野みちをいそぐ小ぐるまの幌にたばしるたま
霞かな

○ 鈴木 天美

あかくくと夕日てりたる塔の上に昨日の雪のなほのこ
るかな

○ 洲羽 修文郎

垢離小屋にこりとる人はたえはて、瀧つぼさむし冬の
夜の月

○ 川上渡梅居

枯あしに木がらしわたる月の夜を千鳥きくかな苦ぶね
にして

○ 本尾秋遊

散りはてし銀杏いばしの枝に二十日あまり五日の月の影さま
わたる

○ 大宮鈴子

木枯のふきすさぶ夜を伏屋よりたえむばかりのきはぶ
きの聲

○ 小川聖學

木がらしに駒いなゝきてとぞれとぞれ騎兵ずき行く明
方の月

五十六

五十七

○ 松井文彦

巖かげに膝とりしきてねらひよる銃てつの手寒く木がらし
の吹く

○ 福田義三

木がらしの吹きからしたる芒あしきはら囚人のせし駕籠かごの行
く見ゆ

○ 眞優美

もりかげに枯枝たきて落粟あしを焼くうなるらの頬ほのあか
きかな

○ 見玉星人

森かげに一人はなれてあそぶ子の小こさき袂たもとにいてふひ
ろへる

○ 寺 四 秀 吉

たゞひとり椎の實ひろふ山寺に鴈なきやみて日かげう
するし

○ 岡 綱 里

柳ちるつゝみのみちを雨にぬれて家鴨のむれの今かへ
り行く

○ 高 橋 翠 柳

もみぢせし梨の葉ちるゆふぐれに小雨そぼふるあほ
森の里

○ 雨 月 生

千曲川みぎはのあしの末枯れてうすきゆふ日のかげ寒
きかな

五十八

五十九

○ 長 谷 川 喬 村

糸つむぐくるまの音にから猫もねぶりもよほす埋み火
のもと

○ 岡 田 袖 靜

徳たかきひじりぢはせし山でらの庭の山茶花はな咲き
にけり

○ 福 田 義 三

鶏はとやにかへりてつみ葉のうへにさびしくまぐれふ
るなり

○ 刀 白 圓

まぐるべく雲ももき夜の甲板に月なき茅葺のうらを見
るかな

○ 原 柳 漣

水かれし野澤のあたり鴨たちであしの葉をむきわりあ
けの月

○ 佐 藤 笛 秋

うなるらがいろは書きたる跡をやかぶく霜しるき欄干
の上に

○ 志 田 香 風

霜枯れて色黄ばみたる小なすびに片足折れしきりぎり
すなく

○ 長 谷 川 喬 村

水やせてあらはれいでし石の上にあさ霜見ゆるほそ流
れかな

六十

六十一

○ 舟 木 紅 露

○ 雛僧のあか汲むすがたあはれなりあく霜をむきてらの

あさ庭

○ 岡 和 里

○ すす雪のつもりし庭にこのあさびこほれし松葉には鳥
のあと

○ 相 馬 御 風

○ さら鷹のゆくへを雪に見うしなひてさつをたしむむ小
沼の夕

○ 森 脇 錦 水

○ 狙ひまきの小猿負ひつゝ行きくれて迷ふやま路を雪より
しきる

○

吉植 愛 劍

雁のこまさむきあしたに庭のすみの鉢の水仙ゆきまば
らなり

○

上 條 鑑 會

とどろく小さく優しき手のひらの跡さへ見ゆる雪連
磨かな



河 田 白 露

むらさきの雲たなひける峰のうへに白き男鹿のはな
み立つ

森 天 龍

獅子ほえて椰子の木ゆるゝ夕まぐれ星閃きぬ金字塔の
うへに

○

阪本統子

舟はあらずふなうた葦にきえゆきて岸にさしやくゆふ
汐の音

○

本多杏江

いくさばてし大野の末のあけがたに荒鷺一ツ血にあき
て飛ぶ

○

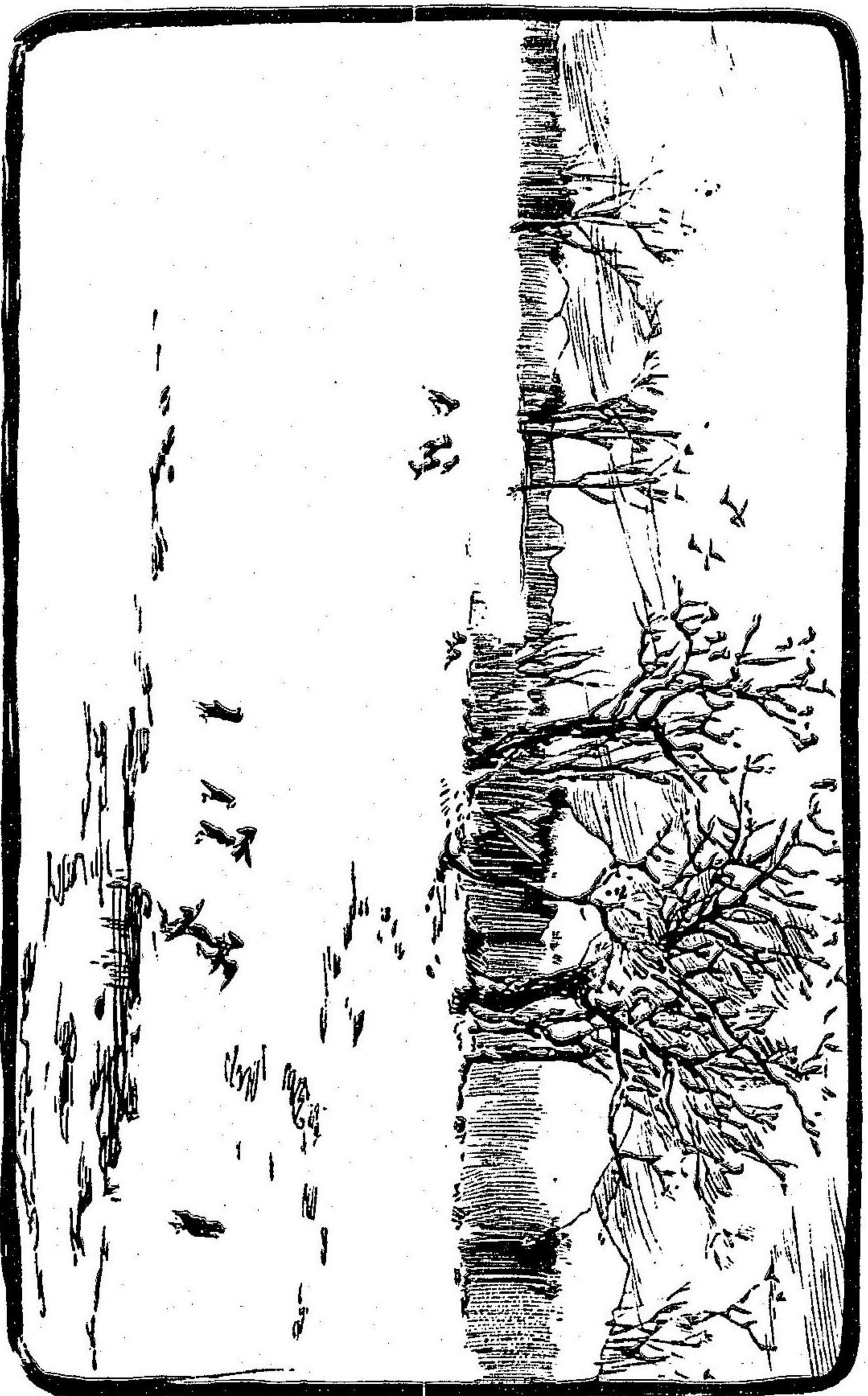
山崎晩溪

夕日かげ斜にさせるひとむらの竹のはやしにけぶり立
つ見ゆ

○

松井文彦

樅の木の枝もたわしに五位鷺の羽だたきするよみさし
ぎの池



○ 福田 磯 三

みたまやのみ池にあそぶ丹頂のはねにちりくる松のこ

ぼれ葉

○ 原 柳 渥

霧こめし松原あたり松葉かくひなうたひくしゆぶぐれ

のはま

○ 川 合 長 流

森かげに七日の月は隠れゆきていつこなるらむ五位殿

のこゑ

○ 高 島 酒 峯

看經けんぎょうのかねの音をむきやま寺にあかつきたかく五位殿

のなく

○ 長谷川 喬村

はしき星かくれし峯の檜原より缺けにかけたる月出で
にけり

○ 原 柳 暹

一つ家のともし火きえて里川のせくらぎひくく月ふけ
わたる

○ 阪本 梶子

篝火の火かけかすかに夜はふけて警固の武士の聲ねむ
げなり

○ 川 田 露 溪

風おれて雲ひくき夜をますらそが家のふみ見るかどり
火の影

六十六

六十七

○ 内田 告 天子

小夜ふけてわかれの酒はつきはてぬ二十日の月は斜に
なりぬ

○ 折 竹 曉 夢

この山のひがし三里にひろき野あり鐵拾はれ小雨ふる
といふ

○ 阪 村 榮 治

夕日かげ淺間に落ちてそつくばの峯にたなびくむらさ
きの雲

○ 千 歳 江 納

大きなる耕種しつかにうきいでぬ夕日にほへる中島の
あたり

○

原見白雁

川沿ひのながきひと村たそがれて岸のあじはら三日月
ほそし

○

落花村

網を干すはまへの松に日は落ちて沖よりかへる舟うた
のこゑ

○

千葉夕浪

隊商の騎馬の一むれ見えざなりて千里の沙漠日は落ち
むとす

○

内田夕關

明星はかすかになりて荒波のよするいはほにかもめ羽
だたく

○

星機樵夫

ありあけの月影くらき波の上に白きかもめのあまた飛

ぶ見ゆ

○

内藤夕波

波を追ひ波に追はれてあまの子があそぶいそべに鷗む
れ飛ぶ

○

平井晩村

むらすとめ飛びゆく藪に日は落ちてひとりきしめく水
車の音

○

金子鳥江

雨はれてうす日さし入る奥殿に小さき畫像のうつくし
きかな

○ 長谷川 露村

半守うたかどにまこえて人がげの窓にうつろふ夕づく
日かな

○ 本 多 正

馬の鞍に酒たるむすびゆふぐれをひともと松のさかの
ぼる人

○ 千 葉 夕 浪

乗りすてし葦間の小舟ゆらめきて夕日さびしく潮のみ
ちくる

○ 木 村 種 規

三井寺のかねのひいきは湖にまきて夕日うるすゝ瀬田
の長橋

七十一

七十一

○ 三 井 院 川

庭池のみづさらひをれば水をあさみ大魚小魚藻にかく

れあふ

○ 見 島 青 嵐

ひらくと橋より落ちし扇のせて舟は見るく舟にか

くれぬ

○ 原 柳 漣

あし原にゆふ風たちてかすかにも白き帆見ゆる利根の

川づら

○ 石 田 幽 夢

松山のとり居朽ちたるみやしろに鳩のこゑする雨のゆ
ふぐれ

○ 中島 夕月

ふるびたる幣ゆひつけしみやしろのうらの老杉神さ次にけり

○ 植野 鴨村

舟にして召すやこよひの筑紫琴つまふとほそく波にきえゆく

○ 阪本 統子

うす月夜はしのあなたに舟見えてすみ繪に似たり投網うづ様

○ 武山 英子

見かへれば香のけぶりのほのかにて手向の花に風そよぐなり

七十二

七十三

○ 平井 晩村

一もとの峯のあか松もやこめてほのかに鳥のこゑきこゆなり

○ 玉水 生

月あはし背ぶり多良岳ゆめに似て波しづかなりありあけの海

○ 長谷川 喬村

馬子唄のきこゆるかたに松並木ひとむらぐろしありあけの月

○ 梅澤 保

ありあけの月を背にして行く馬子の唄を低き松なはてかな

○ 森かげをけさもたづねて書よめばかしろの上に五位鷲
のなく

○ 須 田 幸 雨

かけ茶屋に草鞋かへてのぼりゆく一里さかみちかる石
おほき

○ み す ぐ の や

悲しげにかたるとまして影ふたつ木かげに黒しうし
つ の 頃

○ 櫻 木 真 雄

星ひとつきらめく岡の杉のうへに聲ものすごとく啼くは
なに鳥

上 野 鼓 陵

○ ふる寺の土屏くづれし石間より朱蘭ひともと匂ひいで
にけり

○ 本 多 香 汀

糸つむぐ婆がうしろの小屏風にあまた張りたるふる葉
書かな

敗蕉

尾上柴舟

さしわたる葉越しの夕日ちからなし枇杷の花ちるやぶ
かけの道

とほじろく温泉すゐせんのけぶり見えそめて一里かやはら秋の
日あかし

たかむらは煙に鎖ちてみづくろき城のうちほりゆふべ
あめふる

むらがりてさわたる小鳥かけ絶えぬ裏のくさやまたら
秋のかぜ

はしりゆく櫓のすらの音きこゆなり雪の小ばやし月さ
ゆる夜を

芭蕉葉のひろ葉をすべる日のかげにゑがけるごとし雁
來紅の花

みなと江のあしの穂しろきゆふ月夜わが待つ人の船ち
かつきぬ

木兔ツキのなくこゑばかりして霜枯の木立あらはに月はい
てにけり

すな山をひとつこゆればそなれ松まばらに見えてあき
風のふく

みづうみははなだにあけて朝靄のたゞよふ森になくほ
としぎす

むらさきの背戸のいたがき月てりて夜ぎりかされり木
犀のはな

とざしたる峠の茶屋の椽に立ちて五百重のやまの雪を
見るかな

小ひつじのまつけき夢やまもるらむ牧場にひくき夕づ
ゝのかげ

かさくきの月におどろくこゑはして井のへの桐の露し
とら落つ

薄さむきあきのやまはた日はてりて柿のもみぢに四十
から啼く

さしのこるゆふ日をうけて窓どしに葡萄とる子の頬う
つくしき

ひつじ逐ひて牧人かへるみづうみのかた岸づたひ舟ひ
とつ行く

あさまだき伯耆路行けばやせ馬の瘦せしひたひに秋か
ぜの吹く

首塚のあととふ嵯峨のおさ月夜たけの夜露のまげくも
あるかな

大砲のわたちみだれし野のすゑにゆふへ雨ふりなくほ
とくぎす

野の宮のくろ木の鳥居かたぶきてあきかせさむし下嵯
峨のさと

秋の日のなごりさむけき藤かげにふねさしよせて蘭の
はなとる

ほのじろくあくた火けぶる山畑のくろのたち木に鴉な
きしきる

さしすてゝあるじはあらぬつり竿にあきつとまれり秋
の川ぎし

さらさらの低くよこぎるかげ見えて春かせ立ちぬうら
のあし原

ひまもなき杉のまづくに巖が根の一重やまぶきはなち
りすぎぬ

はるくゝとかすむなは手のやなき原むかし送りし人か
へりきぬ

いろくづは橋にかくれてはこ庭のいけになみあり秋の
はつかぜ

霧しろきあきのあき川魚朶たきてくだるいかだの影ほ
のかなり

てる月のかげにねぶれるさら蓮のはなうごかして夜の
かせ吹く

真砂路に月てるいその小松やま夜半にこゆればわが
かもげ小さき

名もしらぬ鳥のうそぶきと糸絶えて杉のなみ木にあき
風ぞよく

蟬のこきゆふべにせまるふる寺の庭ひやくかにはぎの
はなちる(高麗寺にて)

雲きえぬ鳥かけ消えぬふねきえぬはるかなるかな秋の
みづうみ

蕎麥畑にむしなくゆふべ門に出てし望の夜ちかき月の
かけ見る

神がきに月はのぼりてこまいぬのかたにかしらに梅の
かけあり

さきつらくすれ葉のすゑにふるてらの塔見えてひばり
なくなり

遠くゆく人のうしろ手見おくれはひとむらしぐれ松に
ふりまぬ

かしの實のひとつあちくるところきに小魚かけちる山
の井の水

老杉の木の間もりくるともし火に夜霧ひとすぢ見えわたるかな

みちのべのさのもすしきも霜がれて二十五菩薩かざあらはなり

茶つみうたかすかにひらく岡のへに桐のはなちり風ぬるく吹く

島がくれ月のぞくらしきろがねのひかりさしたりあら磯の上に

きつね火のよひに見えたる繩手路の松原つたひなくほとくぞす

をどり子はみな散りはてし月ふけし寺のひろ庭たむしのこと

うつむきて鐘樓をくだるのりの師のうしろ手をむきゆふ嵐かな

百日紅まばらに咲きてやまざらの庭まづかなり日ぐらしのこと

ろり立つなぎのおほ岳ゆき見えてあき風さむし葉は
らかや原

よろめきて家鴨ひとむれ行きすぎぬ穂たて花さく川沿
ひのみち

垣越しに蛇の目のかさの行く見えてあめなゝめなり連
翹のはな

寒 菊

金子薫園

鳥のかげ窓にうつろふ小春日に木の實こぼるゝおとま
づかなり

枯れはてし蓮田の末にあひる飼ふ家ふたつ見えて秋の
空たかし

うねうねとめぐれる野みちたそがれて夕月ほそしつゆ
くさの花

塔たのさきのみ見えてまびりあふめを葉わか葉にさみだ
れのふる

かゝみ餅すこしくづして走り行くねずみの影のさびき
夜半かな

風をりをり葉蘭にさはる朝庭に小鳥ひとつきて餌をあ
さりある

江の北にわけの鐘鳴るまのしめに落ちくる雁のかげか
すかなり

ふた坪のうしろの庭に菊咲きてほかりほかりと日かげ
のどけき

あまわれしよへの西かぜをさきりてやれし芭蕉に霜う
すく見ゆ

うきさらし手をひかれつゝなごゆきぬ野てら一里の小春
日よりに

手むけにと植ゑし小はなの花をきこめを風さむし母の
あぐりき

おはしまに白きゆかたのほの見えてほとくさす啼く湖
のゆふへ

秋かぜに吹かれふかれてひとつ二つ咲きし朝がほ花の
ちひさき

梅もどきとほれてさむき窓ちかくよれるめじろの人に
あそれず

うすもやにかくれてそれと見えざりし岡の一つ家朝日
さすなり

枯はすにうすれしゆふ日かけきて水おとさむく鴨ふ
たつ飛ぶ

玻璃のまど雪夜にわけてとひよりし鹿に餌をやる人う
つくしき

夕なぎにまほふくくぢら遠く見えて秋のそらたかし天
くさの灘

秋の日の芙蓉のはなにうすれゆくつしみのあたりわが
舟はてぬ

おひしげる木かげうつりてほのぐろし一すぢほそき谷
川のみづ

ゆふもやのはれゆくかたに家見えて垣ほのじろしゆふ
がほの花

さきにほふつゝみの花をよそにしてともはねふれり春
の川ふね

むかつをに聳ゆる塔の朱塗ふりてのこる夕日のかげさ
むげなり

小はる日を山おりくればひよ啼きてふもとの川にわた
し舟ゆく

ふたつ三つとびゆく鳥のかげとほく夕かせわたる芽は
ちかや原

峯の寺ゆきにうもれていりあひの鐘の音低く今日もく
れにけり

日わたりの椽にならへぬ鉢うゑのうるしのもみぢきら
ぎくの花

菊ばたのきく見て立てる老人のせなぬくげなり小はる
日よりに

ひとむらの芙蓉のはなにかぜ見えててらひあさ庭ひよ
鳥のことゑ

畔つきて坂のほりゆく荷ぐるまのつみし大根にゆふ日
さすなり

露のはなかたへに咲ける小はる日の手あらひ鉢に小と
り水のむ

三井寺のかねの音しつむ雨の夜に雁低く啼くみづらみ
のほとり

またよきてともしうするゝ寒き夜に水仙かをる文づく
ゑのうへ

駕籠二挺たうげにいそぐ夕ぐれを茅はら篠はらあめに
なりゆく

ところどころもみぢこぼれし椽側に小鳥あそびて盡し
づかなり

ふたつ三つ陸くわにのぼせし舟見えて富士のねとほし夕ぐ
れのそら

鳴のこゑとほくきこえて更くる夜を御濠のまつに雪ま
ろくふる

かれあしのおやぎさびしきゆふ月にひとむらくろし水すゐ
神かみのもり

黄になりて風にみだるゝいてふ葉の大木にはゆる秋の
日さむき

ゆふ川に飯いひたくふねのうすけぶりほのかに立ちて雁の
こゑする

ひともとのかれ野のすゑの椎の木に小とりむれる霜
しろき朝

ゆふ風に茶のはなちれる墓みちを阿伽くみて行く人か
ゆさむき

風にあげて風にくれゆく枯野はちいなく馬のこゑか
すかなり

清水わくふる井のあたりおもしろし清しうつくし春の
わかくさ

かれ蓮にゆふかぜさむき池どののおはしまちかく雁む
れて飛ぶ

まゐる窓のもとにかくれし水ひきのはな見えそめて蜻蛉
飛ぶなり

日わたりの窓ちかう咲く山茶花に今日もまたきくひよ
鳥のこゑ

みづうみの上に鶯舞ふ小はる日を矢橋のあたりふら帆
行く見ゆ

ふたつ三つ蜻蛉さまよふ小柴がきさびしく立てり日ま
はりの花

みづうみの吹雪になりし夕まぐれ見えみ見えみみ
が舟行く

叙景詩完

叙景詩掲ぐる所、皆文藝雜誌『新聲』より抜け
るもの新聲歌欄は金子薫園君選評の下に、う
ら若き詩人が、満腔の情思を洩す所。滔滔た
る現時の新派和歌なるもの、淫靡猥雜誦す
るに堪へざるなかに在りて、聲調流麗、溫藉
にして雅馴なるものは、唯新聲歌欄あるのみ。

明治三十四年十二月廿八日印刷
明治三十五年一月一日發行

定價貳拾五錢

不許
複製

編輯者兼
發行者

佐藤儀助

東京神田區錦町二丁目六番地

印刷者

佐久間衡治

同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

印刷所

株式會社 秀英舎第一工場
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

發行所

東京神田區錦町二丁目
電話本局二八五二番

新聲社

小栗風葉君著

新作小説 梢の花

特製頗
美本
大判百餘頁
定價十八錢
郵税金四錢

アカツキ
第一

表紙……アカツキ(石版十)……一條成美君筆
口繪……野外の訣別(寫眞銅版三色印刷)……渡邊審也君筆
附録……新春繪端書(石版八)……一條成美君筆

可憐梢上一枝の花、戀を與へて戀を奪ひ、芳芬空しく地に委せしめんとしたるものは、是れ奇險なる時代の思想なる也。『梢の花』は、實に群小作家が溜々風を逐うて織巧猥雜の作を列ぬるの時、獨り自ら進んで此時代の思想を描けるもの、着想最も大膽、且つ斬絶。文字絢爛を極めて人をして戀の芳香に酔はしむ。文藝革新の大抱負を有せる我『アカツキ』が第一編として、斯くの如き小説界空前の傑作を紹介するを得たるを深く喜ぶ。

アカツキ

は月刊の新作文庫也、最も進歩せる思想を描ける小説又は美文(百頁以上)を掲ぐ、表裝挿畫亦之に遜らざる清新の趣致あるもののみ也。
定價一部十八錢郵税金四錢、六冊前金郵税共金一圓二十錢

著 君 明 有 原 蒲

ば か わ 草

畫 君 也 審 邊 渡

晩翠遙に南歐の地にさまよひ、藤村はみずいかる信の山に在り。中央韻文壇の覇權を握る者は、實に我蒲原有明子也。子の詩、幽邃崇高の調を以て、清新奔放の想を歌ふ。戀に惱むの涙あり、世をうれたむの血あり、自然を讚するの情あり、之を掩ふに七五の辞、五七の調を以てし、抑揚自ら節に中り、抗墜心に適ふ。激する時は悽愴人の心を寒からしめ、温まる時は、艶妖眼を眩せしむ、其多彩絶美の手腕は、眞に韻文壇を獨歩するに足る、宜ざる哉一部の青年其詩を學びて、有明調あるものゝ至る所に見るに至れるや。我社即ち子に乞うて、子が得意の作數十篇を集めて『草わかば』と題し、壬寅韻文壇に多大の光彩を添へんとす。

錢 四 稅 郵 * 錢 五 廿 價 定

新派畫家 一條成美君著

(製本既成)

新 派 彩 畫 法

全一冊 定價廿五錢
頗美本 郵稅金四錢

著者一條氏は獨特の描線と獨創の色彩法とを以て新一旗幟を樹てたるの士、其超凡の手腕を有するものと、氏の作物の大なる歡迎を受けるに看て知る可し。此書は實に氏が特長の彩管を揮つて、多年研究の結果を發表したるもの、一見直ちに色の配合、彩色の按配、運筆の方法を知り得可く、以て水色嵐光筆に任せて浮び、畫布板上自然の聲を聞くの妙境に臻る可し。此書は實に新時代彩畫の絶好模範たる也。

阪井久良伎君著

珍 派 詩 文 へ な づ ち 集

全一冊

定價十五錢
郵稅二錢

題して『珍派詩文へなづち集』と云ふ、題目既に奇、内容奇ならざるを得んや。著者は一代の警句家阪井久良伎君、其獨特の快筆を揮うて所謂珍派文學を鼓吹す。書中、評論あり、隨筆あり、和歌あり、狂言あり、落語あり、萬態一ならずと雖も、飯する所は彼春の和歌を嘲り、所謂新詩人の敗徳を罵れるもの、一讀此笑を禁ずる能はざらしむ、而も笑のうち涙あり、滑稽のうち諷刺あり、著者は眞に明治文壇を憂ふるの士たる也。

毎日新聞主筆 島田三郎君序
 國民新聞主筆 德富猪一郎君序
 文學博士 高楠順二郎君序

大日本
 文章學會
 出版

能文大成

總金 頗紙 七百七十
 文字 本數 頁百七十

講述者

文學士 大町桂月
 文學士 久保天隨
 文學士 內海月杖
 文學士 十時彌介
 文學士 杉藤敏華
 文學士 大江藤鶴
 文學士 大沼芳林
 文學士 山川則
 其他數名

定價二圓六十錢(日方八百) 勿送包送
 此際申込者には小包料全免
 * * * * *
 本書は一流の名家が、各専門の智識を傾倒して、能文の眞訣を説きたるもの、一讀よく文章の蘊奥に通ずるを得可し購讀者には本會生徒の資格を與へ文章無料添削の特典は、毎月無料添削の特典を與ふ

- ◎文章作法
- ◎能文要訣
- ◎文章百話
- ◎文法解剖
- ◎日本文典
- ◎修辭學
- ◎審美學
- ◎美辭類纂
- ◎日本文章史
- ◎日本文人傳
- ◎名家文粹
- ◎新開學講義
- ◎國文評釋
- ◎英文評釋
- ◎漢詩評釋

在大學院文學士
 久保天隨君著述

東西文豪評傳 (卷壹) 全一冊

定價廿五錢
 郵稅金四錢

弱者の聲

弱者の名の下に權利は壓せられ、枉屈伸ぶるに所なき者に代りて、其筆となり、其舌となり、大叫喚、大絶叫、之を天下に訴へ、且つ彼等一道の慰安を與ふ。

掲載目次

牢獄に接近せよ
 富者の福音
 薄倅の學工
 紡績の女
 弱者の慰安
 可憐の兒
 貧しき者は幸也
 弱者の奴隸

田口掬陽
 正岡梅溪
 高須梅溪
 西村夢溪
 生田葵山
 高須梅溪
 奧村梅泉
 正岡梅溪
 高須梅溪

價十二錢 郵稅四錢

從軍記者 佐藤紅綠君著述

從軍決死隊

從軍畫家 石川欽一郎君畫

價廿五錢 郵稅四錢

著者昨年北清の戰に從ふや、四名の同志と決死隊を組織して、其戰を觀る、今其從横酒脱の文を以て之を録す、光景宛として睹る可し。挿畫十葉は石川從軍畫伯の筆に成り、天覽たるもの也

山口中將、福島少將題
 渡邊男爵、諏訪子爵題

矢崎少尉

身に卅創を被りて北京城外* 價廿錢
 に斃れたる青年武人の典型* 郵四錢

高等師範教授 文學士 登張竹風君序文
在大學院 文學士 尾上柴舟君譯著 (第二版)

ハイネの詩

巻頭、ハイネの肖像(寫真版)

順美本 定價二十錢
郵稅四錢

附録、ハイネ評傳(三十頁)

戀の征矢に胸を射られ、薄倖の命運に身を悲しむ者は、來りて「ハイネの詩」を誦せざるや。ハイネは獨乙叙情詩人の尤あるもの也。その詩優麗にして輕妙、裡に炎ゆるが如き情熱あり。戀と歌ひ、人生を歌ひ、運命を歌ひ、乙女を歌ひ、故國を歌ふ。柴舟氏滿腔の精力を傾倒して之を譯す。豊富の詩才、艶麗の詩筆、巧みに其面影を傳へて、薄倖の詩人の面目躍如たらしむ。蓋し獨乙詩人の詩集翻譯の嚆矢にして、短歌新體詩の作者を裨するとの大なるべきは勿論、一般文壇に志を寄する者の好侶伴也。

懸賞詩文集

桂花集

播落彩樓花
畫葉虹木園刷
一條成美君筆

「新聲」紙上、賞、百金を懸けて弘く募集したる小説、美文、論文、詩歌、俳句、等々を掲げたる者。天下の俊傑此の一卷に集りて、縦横の才筆を競ふ、青年文壇の偉觀也。

附録
雁、影
ちぎれ雲
題桂花集
亡國の韻
遊仙窟と紅樓夢
とを論ず
金子薫園 全定價二十錢
田口菊汀 一冊定價十二錢
高須梅溪 一冊定價十二錢
正岡藝陽 一冊定價十二錢
奧村梅阜

正岡藝陽君著

(大判全一冊 * 定價貳拾五錢 郵稅四錢)

嗚呼賣淫國

卷頭 寫真 新橋梅香 伊藤博文 市村家橘

次目

賣淫國とは何ぞ 醜業婦を有せる社會 賣淫學生 賣淫の首府 其他
當代の淫猥作家 牡丹侯を戴ける社會 賣淫文學 田園の淫風 數項
優柔不斷の社會 奇怪なる賣淫の現象 姦淫詩人 モルモン宗

新聲社同人著

明治文學家評論

表紙畫 百穂君 全一冊 定價三十錢 郵稅金四錢

次目

三宅 雪嶺 福地 櫻痴 島田 三郎 岩本 善治 江見 水蔭
竹越 三又 内村 鑑三 幸田 露伴 田口 鼎軒 國府 犀東
高山 樗牛 松村 介石 山路 愛山 大町 桂月 田岡 嶺峯

正岡藝陽君著述 (増補第四版)

時代思想の權化 星亨

大判 定價廿五錢
洋製 郵税金四錢

一代の梟傑星亨、彼は已に歴史の人とされり。嗚呼五十年の長き歴史は、いかなるものを吾人に教へたる乎。藝陽子、彼を以て黄金權勢の外何物もなき明治時代思想の權化なりとあし、縦横、其人物性行を論ず。觀察奇警、論斷的確、殊に世人の未だ知らざる星の平生を紹介する所趣味極めて多し。

南風館編輯部編 (小説集)
鏑木清方 平福百穂二君畫

まごころ集

次目
晚江 風葉 二人の海 水滸
夜瀛車 魯蕙 一節切 春葉
零落 蘆花 道すがら 春雨
文から 柳浪 浮萍物語 菊山
十萬圓 眉山 尾花が濱

正岡藝陽君著 (第二版)
新聞社の裏面 定價郵税
共貳拾錢

社會の秘密を摘發する新聞社には、いかなる秘密も籠れる。白聖の大館其門戸を固うして容易に人の窺ふを許さず。唯茲に秘密の鎗を握れる者藝陽子あり、縦横の筆、最も詳密に、最も痛切に、其秘密を發き、私行を暴露して剩すなし。

文藝學士寺內至誠君述

新婦人觀

第一 婦人の使命

佳人讀書(色刷)

一條成美君畫

第二 婦人美觀

小女(色刷)

一條成美君畫

月刊婦人叢書 ◎定價 一部廿五錢 六部一圓四十錢
郵税金四錢 每卷 讀切

第三 女學生

女學生(色刷)

一條成美君畫

第四 社交の女王

近刊

浦原有明君歌 一條成美君書 生田葵山君著

自殺

價五錢 郵稅四錢

自殺は果して罪ありや、自己の生命を自己の手にて亡すは、果して罪ありや、此物語は之に向て説く所あらむ。
世人は往々戀と同情とを混同す此物語を讀て、其誤解のいかに大なる悲劇を來すかを知れ。篇中に虐殺あり、然れども其方法のいかに文明的にして、正々追らざるかを見よ、主人公を一個のウエルテルズムの感念に裝はれし人と思はれ、そは大なる僻事なり、男子の休面川此一語を重じて劍と銃とを握りし人也

大學院文學士 登張竹風君序 文章學會講師 山川芳則君著

美文評釋

全一冊 菊判 定價廿五錢 郵稅金四錢

本書は、露伴、雁外、眉山、桂月、一葉、樗牛、天隨、馮虛、姑射等十家の作中、散文詩と稱するに足るべき美文を評釋したるもの也。其評は嚴正にして、微疵尙ほ許さず、之を指摘して後進の誤を避けしむるが如き、從來の評釋書類の、單に原作者を贊するを事とすもの、比に非ず。

高須梅溪君著

青年觀

全一冊 定價十二錢 郵稅四錢

青年の意氣銷磨せるや久し矣。之を鼓吹し、之を指導するものは誰ぞ「青年觀」は最も忠實なる指導者也。最も熱誠なる鼓吹者也。全篇を分つと十篇を精論して、熱血淋漓たる「卷末の絶叫」に終る、文章雄健、論議正大、光芒燦として眼を射る、眞個文界の雄觀。

新聲社同人作

青葉蔭

全一冊再版 定價拾五錢 郵稅金二錢

夏の野邊 浦原有明 ●夏の田園 高須梅溪
夏の都府 田口掬汀 ●夏の水草 金子薫園
夏の深林 正岡慈陽 ●夏の海畔 西村醉夢
夏の追憶 奥村梅臈 ●夏の放言 嵐嶺山客
表紙百 繪口書

妖堂居士著

文壇樂屋觀

定價拾五錢 郵稅金二錢

文壇の下げ幕切つて落せば、俸腹すべきと極めて多し。妖堂居士例の鼻の如き眼を以て、闇中捕捉し得たる幾多の奇談珍話を、流麗なる快筆に彩りて、之を世に傳ふ、一章一話、趣味溢るゝ斗りにして、讀過一再、塵情忘却し去るべき也。

大日本文章學會編纂

文章形容辭典

定價參拾錢 郵稅四錢

本書は古今の文學書類より出所出しき形容語を集め、題によりて分ち、順に従つて次第し、難解の句には、一々明細なる註釋を附せるなど、用意極めて親切也。此書を机上に置く時は形容の辭句に苦むるとも、筆端窘束するの患をかゝるべし。

わか草

定價郵稅 共貳拾錢

春南、鳥水、葵山、梅溪、薫園、醉茗、露葉、荷葉、花外子等の小説美文を收めたる者。

森鷗外先生序文〔六〕 質問自由
大下藤二郎君著

水彩畫の葉

全一冊袖珍 定價二十錢 郵税金四錢
丁寧懇切、微を穿ち、細を明かにし、毫も素養なき初學の士をして、尚ほ且つ其堂奥に入るを得せしむる寶典也。各學校の修書參考書として續々採用せらる。

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全二冊 定價卅五錢 郵税金四錢
俳句は詩形の短小なるが故に、簡警朦朧を主として餘情を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るが故に、解し得可からざる者極めて多し、本書は此缺點を補ふものにて、古今の名句を選びて、丁寧懇切なる註解を加へ、且つ嚴正なる評論、其價値の存する所を明かにす。

新聲社同人著 (第四版)

三十棒

定價二十錢 郵税四錢

『大坂毎日』批評 勇往の文縦横筆、氣焰天に揚るの意氣あり、この抱負ありて、以て文壇に馳騁するに足る、亦一讀すべき好冊子也。

墳墓

定價二十錢 郵税四錢

本書は人生の安息所とも云ふべき墳墓を描きたるもの、文字流麗、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふ可し。

大町桂月君序 小林柳村君著
一條成美君 山中古洞君書 (五版)

戀愛と文學

全一冊美本 定價貳拾錢 郵税金四錢
戀愛は實に人間最高の情想に非らずや。人世あれが爲に趣味あり、之が爲に平和あり、「戀愛と文學」ありて、亦長く青春の子女を慰む可し。行文艶麗、卷中の佳所は、朗々高く歌ふに足る可き者あり。

正岡藝陽君著 (六版)

婦人の側面

全一冊美本 定價二十錢 郵税金四錢
世、本書の如く大膽に婦人を解剖したるものなく、本書の如く公平に婦人を論評したるものなし。流麗快暢、趣味湧くが如き文字の間に、婦人の光明と闇との両面を説明し盡くして、亦遺憾なし。

白露集

(總プロム編纂本)
文學士 久保天隨君
文學士 淺野馮虛君
文學士 戸澤始射君 著合
中村不折君 書四
下村爲山君 版
(定價拾錢 郵税四錢)

此集は、戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を描きたるもの也。人生の運命を知らんとする者、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙け。若しそれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、煥然目を奪ふ。

新 作 小 説

新 婚 旅 行

徳田秋聲君
生田葵山君 合
田口掬汀君 著
西村渚山君

参 版
全一冊洋装
挿書四色刷
定價卅五錢
郵税金四錢

結城素明君
一條成美君 挿
平福百穂君 書
渡邊香涯君

田山花袋君著

野 の 花

定價三十錢 郵税四錢

我に初恋の佳人あり、半生の苦
樂共にせんと、心に誓ひるしに、
斗らざりき、我を懐うて日夜懊
惱、身神衰へ行く少女あらんと
は。其人賢にして美、殊に振分
髪の幼馴染あるに至りては、情
緒いかで亂れざるを得可き、嗚
呼鄙べての障礙を排して、清き
初恋を保つは是乎。我爲めに不
遇の戀に泣く人の情を受くるは
是乎。這般戀の悩みを描けるも
の、『野の花』の一巻とす。行文
綿麗にして描寫精細。

河東碧梧桐君序
大橋文學士序文
寒川鼠骨君著

断 霞 録

全一冊洋装
定價廿五錢
郵税金四錢

青山白雲と市井紅塵とを問はず、輕妙洒脫の筆を
以て縦横に描く。而して其描寫の精細ある、塵
の微尚は遺さずして、讀者をして身親しく其境に
在るの思あらしむ、夏季臥遊の友となすべし。

緒方流水君著

塵 影 録

全一冊再版
定價參拾錢
郵税金四錢

流水君の論議最も大膽、忌む所なく憚る所なく、
恨を天下に買ふを辞せず、觀察極めて奇警、常に
他に一步を先じて縦横の抱懷を吐く。『塵影録』よ
れ明治文學の側面觀ある也。

二 版 出 來

露伴 柳浪 眉山 魯庵
水磨 宙外 鏡花 風葉
抱月 天隨 鳴雪 直文

創 作 苦 心 談

再 版 出 來

本書は上掲十二家の談話を輯録
したるものにして、創作の苦心
談あり、作者の経
歴談あり、文壇に
對するの氣焰あ
り、興味多きは
論なしと雖も一
に於いて小説美
和歌俳句の作法
作者の経験に照
して説けるもの
に比するものな
かるべし。

○定價貳拾錢 郵税四錢

不知庵 柳浪 鏡花
萩の舎 鳴雪 風葉
水蔭 及其庭園

堅中の壇文年青

新聲

誌雜藝文刊月

新聲は文學美術の巨匠に大雜誌也。掲ぐる所は、韻文、雜錄等、「主張」欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ「人物」の文士月旦と、文壇風聞記とは、他に比を見る可からざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。「餘材」の甘言苦語には、覆面の武者銳刀を揮うて辻斬を試むるあり、言、文學美術社會演劇の各方面に貫けて百人百様の觀察、亦一代の奇觀也、其他の諸欄皆青年文士の熱血にあり、一篇一章三編に價せざるはなし。美術的趣味を鼓吹せんが而して昨年よりは大に繪畫を毎號十數面を掲げ、明、一條成美、平福百穂。繪畫を毎號十數面を掲げ、其他の新派畫家、筆に於ける繪畫を毎號十數面を掲げ、古代の繪畫を寫眞銅版に製して出し時々文士の肖像を載す。而、舶來の光澤紙を用ゐて印刷を鮮明にすして、紙の天に朝する勢を以て文壇を横行潤歩が今や「新聲」の天に朝する勢を以て文壇を横行潤歩に至れるは眞に偶然に非ざる也。

定價 一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢
郵稅 一部一錢、〇每月一回十五日定期發行〇

成完冊六部全

評釋叢書

定價	第一部二十錢〇六部前金郵稅 共金壹圓四十錢〇各編讀切	第六古詩評釋 久保文學士著	第五英文評釋 淺野文學士著	第四國文評釋 內海文學士著	第三俳文評釋 阪本文學士著	第二漢文評釋 久保文學士著	第一漢詩評釋 久保文學士著
----	-------------------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

青年文學叢書

- 第一 文學攻究法
- 第二 美文作法
- 第三 美學大要
- 第四 論文作法
- 第五 韻文作法
- 第六 青年文學

米國華君著述
江藤桂六金共三錢
全部六冊十錢郵稅二錢

農學士 柳内蝦洲君著述

學生叢書

全部十册 每月一定價 一部十八錢 郵稅四錢
回發行 十部郵稅共壹圓九拾錢。

每日新聞主筆 島田三郎君序

第一 廿世紀の學生

訂正再版

世紀一變、舞臺は二十世紀に入りて、日東帝國の面目將に一新せんとす。此間に處して、名を擧げ業を成さんとする學生は、いかなる道を辿り、いかなる方向に進む可き乎。『二十世紀の學生』は一卷十章、之を説き、之を教へて亦餘蘊なし、加ふるに文辭流麗、論旨嶄新、彼拙劣無趣味なる文字を以て學生を教ふる世の教育者先生と同一の比に非ず。今回再版出來す、弘く閱讀を待つ。

農學士 志賀重昂君序

第二 東都と學生

附 東京學
錄 校一覽

東都は果して學生の天國なる乎、はた墮落の階段なる乎、東都十方の學生皆之に感ひ、地方負笈の志ある者亦之を疑ふ。本書は東都の學生の内情、及び其周囲の實狀を明叙して、一毫掩はず。在京の學生を規し、鼓吹し、獎勵すると共に、上京せんとする地方の青年の心得を説くと詳細を極む。巻端、志賀重昂君の學生に關する論文を掲ぐ、滔々數千言の大文字。

青山學院總理 本田庸一君序

第三 學生と生活

既刊

東北の奇傑、教界の偉人本田庸一先生は本書に序して曰く「苦學といへる事は現時の一問題となれり、之に向つて説くもの日に多きを加へつゝあるは喜ぶ可しと雖も、よく學生社會の狀態に照し、學生をして安じて自活獨立せしむるの法を講じたるものに至つては亦見る可からず、柳内農學士の近著『學生と生活』はよく此缺點を補ふもの、時の必要に對して一の好資料を給せる也」云々。

米國哲學博士 淺田榮次君序

第四 理想的學生

附秋の詩美

今日學生に關する書籍乏しからず、唯それ「理想」と云へる高遠なる問題に向つては、筆を附くるものあるなし。學生は、如何なる理想を抱いて、學窓に在る可き乎、はた如何なる人物を理想とすべきものなる乎。本書は筆を此二問題に染めて、理想の尊む可きものなるを説き、學生の理想的人物として尊崇すべき偉人を擧ぐ。文辭例によりて流麗平明、一讀よく此大問題を解するを得可し。

辯護士 花井卓藏君序

第五 學生の將來 既刊

學生の將來は、學を卒へて名を社會に現はさんとするに在り。之を達せんとせば、其目的の選擇を嚴にし、自己の資質のよく其業に適するや否やを研究せざる可からず、學生の失敗に終る、多くの、此二問題を閉却するに在り。本書は最も親切に、最も懇篤に、最も割切に、之を説くと詳細を極む。學生諸子若し熟讀著者の意に恃るとなくんば、必ずや將來の方向を誤ることなかる可し。

學生叢書號外

文學 實業 貧兒成功談

全一冊 定價貳拾錢
本一冊 郵稅金四錢

貧兒力行圖 (色刷) 一條成美君畫

逆境の下にある青年諸子、諸子は徒手空拳、名を成し志を遂げんとせば、業に勉め、學に勵むの傍ら、先進苦學の跡を尋ねて、習ふ所なかる可からず。是れ實に、成功の最大捷徑なれば也。本書は現時知名の某々二氏の、經歷談にして、一は苦學力行、あらゆる障害を排して、文學博士の榮冠を得、一は厘を積み、金を重ね、經營辛苦、遂に實業界の大立物たるに至るの徑路を得、眞に絶好の立志篇也。而も立憲篇と云ふも、鹿爪らしき倫理道德を講ずるに非ず。眞に絶好の立志篇を以て小説的に縦横描き去りて詩味横溢、知らずの裡に無限の教訓と、無限の趣味とを得可し。切に學生諸子の一讀を待つ。

第六 學生の立志

豫告

三十五年一月十日發行

注文規定

右目録中に掲げざるものは、總へて品切とす。増版出来の際は更に廣告す可し。

注文は一切前金とす、郵券代用は一割増たる可し。

注文書籍中、品切のものあるときは、直ちに其旨通知すべきにつき、購讀者は他の書籍に変更せらる可し。

送附の金圓に剩餘あるときは、返金の煩を避けて、金圓相當の圖書切符を發行す。購讀者は次回注文の際、代金の中に加へて送らる可し。

返信を要する時は、往復端書又は返信郵券封入するを要す。

注文狀の宿所氏名は、正楷にて認められたし。字体亂雜あるは書籍不着の原因とあると多ければ也。

